首書

源氏物語

まきろ

巻十一

宮城縣図書館蔵

宮城縣図書館

四 哲 一

○河 第廿五巻名大空をかよふ幻ゆめにだに見えこぬ魂の行衛たづねよ
○花 以哥為巻名御法の次年源氏五十二歳の時の事也此巻には正月より十二月までの月をつゝ
さまを次才にのせたり余巻にはいまだあらざる筆法也六条院の悲歎の事月〻月〻に長き事をも
其上とかくして心をあかさせる也薫ハ源氏四十八歳の時生れて今年ハ五歳に成給ふべし
○孟 まぼろしハ幻術者と云也変化して虚空に花を降せ術あるものと云也

○春のひかりを 河 古今 いづくとも春のひかりはわかなくに まだみよしのの山は雪ふる
細 百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく 此哥の心あり
○御心ひとつハ 花 春のひかりハあらたまれども六条院の御心のうちのかなしさハあらたまらぬ心也
○とにハれいの 弄 外也 一本とのにハ 細 御法巻にも廿日あまりそおまへにまゐりあり歟
ならさるをへだてて見る也
○兵部卿宮 細 蛍也
孟 此羽子そふれけるを対面し給ハめをとゞむ
○我宿ハ哥 源氏也 細 春と兵部卿宮に申て也
河 後撰 あるじなき菊色そへし白菊ん花もて

春のひかりをみ給ふにつけて
もいとゞくれまどひたるやうに
のみこゝろひとつはかなしさの
あらたまるべくもあるに・とには
れいのやうに人〴〵まゐりなど
すれど・なやましきさまにもて
なして・みすのうちにのみ
おはします・兵部卿のみやわたり給
へるにぞ・たゞうちとけたるかた
にて・対面し給はんとて・御せうそこ
きこえ給ふ
わがやどは花もてはやす人もな

くやと君をこそまつらめ

○ことしあて晋　寅也　細　源氏とをくさめんう
しあさてうしろ也大方の春うて八すーと

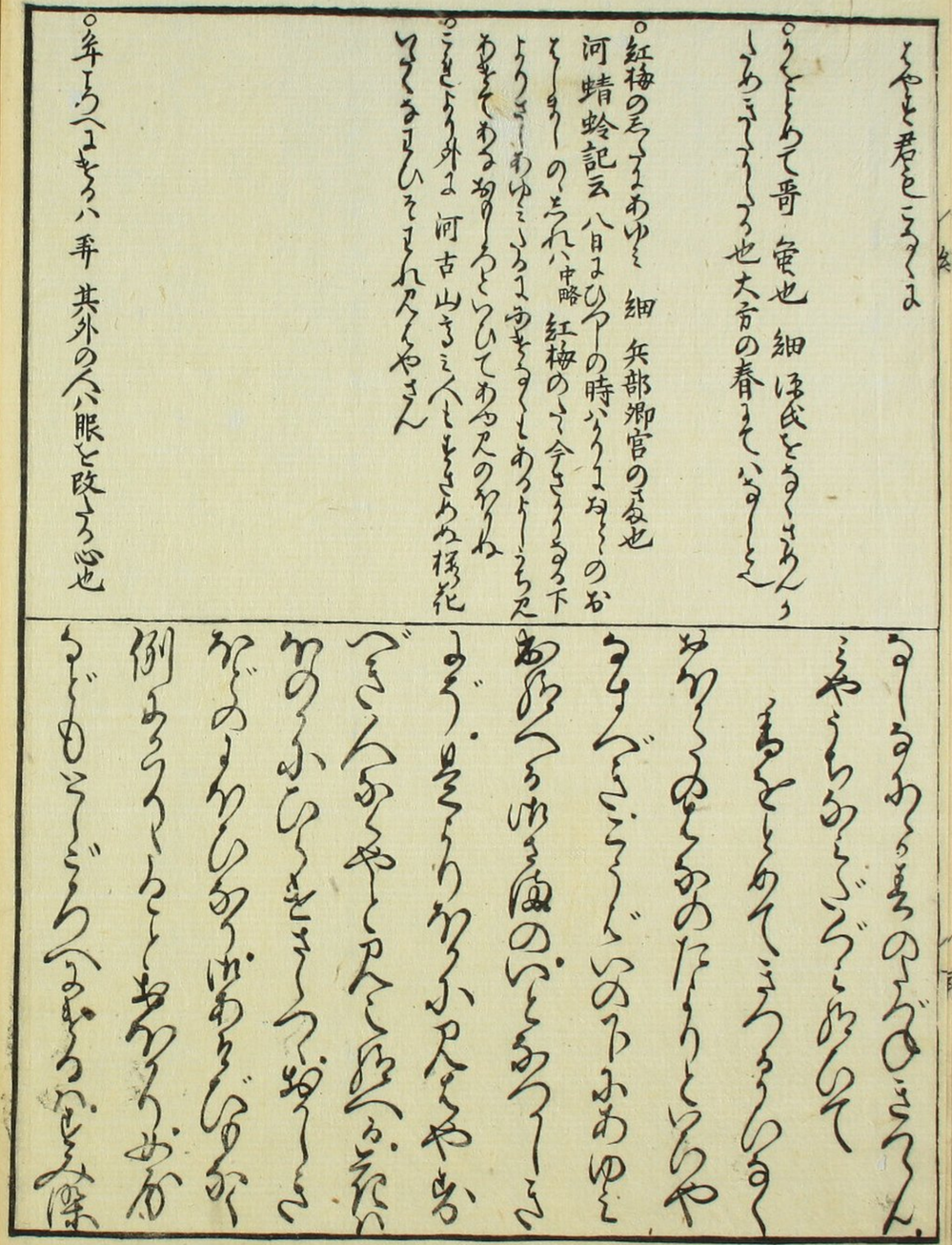
○紅梅のこてよあゆミ　細　兵部卿宮のこな也
河蜻蛉記云　八月ひつの時ハうよ月ゝのお
ゝ　のこれハ中略　紅梅のゝ今さうる下
ようさーあゆミうるゝ　ゝもあるすーとあるーうち足
あをてあるなりうとうひてある足のかりね
○ことうる外ゝ　河古山さゝ人ゝとゝさあ桜花
いてゝなるひそまれ人ゝやさん

○年ろ人ゝよもろハ　年　其外の人ハ眼と改さろ心也

○まゝうれるく　細　源氏出頭すさ少ゝ人ゝ絶と
足まらゝとをなくさわゝとろ也

○年ろ人ゝまろやゝる　盃　源氏のゝ手とをもれゝろ
人ゝうも大ようて中ゝくゝるをゝるれ源氏紫上
の在世ゝとゝさゝ足ゝるゝ也源ゝ今ハ一而ゝ
うゝてゝゝ中ゝとゝさゝるゝ能ゝ

○ゝかゝうう　或秋　大惣也　大底うゝ也



○ひきさきと　細　きの字清濁両義あり濁てよむときハ次の間なるを引さぐる也清てよむときハ引避也両説ともに用之

○さしもあるまじきこと　花　紫上の思さましく心をうけて給へる也
時女三宮朧月夜なる心をとりて給へる也
或抄　源氏の心也　是ハ朧月夜のこと之

○又なくやむごとなき　或抄　是ハ女三宮のこと也

わまゝこおぼしのあそびに門ひきさけつゝ
まづかへ世給ふなつまつくおぼすに
いそへのゆかりおぼし給ひうく
もありなんおぼさればはなれがたき
のみくるにまつりてもさし
もありきしまじかりけるにさゝを
つゞけぬかくるにかくおぼしける
ろくさだめ給はんとふ給へど
をおぼしつるよりもはなれ給
まそもみまあやむごとなきさまし
さてふかつきてもさしやすからん
をかへしもありなんおほしとも

○人のうき心も　或抄　紫上ハ源氏の志浅きと思給ふ
給ふ御恨ハさる事と八一端ハ恨給ふべきされとも恨
くそ給ふハあやまりと也

○さてそも　或抄　紫上にそひたてまつり
せられけるを悔しく思給也

○むねうちも　河　憂喜塡胸と云心也

○そのをりの　細　さうなき人也

○入道宮の　花　此一段ハ若菜上巻にあり
まへと也

らうくぢおぼしのみこそかくさん
なるしうた人のうちとけなれと
ようなくてまつりひおぼしえんず
さえ給ひとおもはれしなごりの
つゞいはんすこしさておぼし
なるしもみさしてそもこゝろを
まぶり給ひしまんどのびとおぼしう
ふかうおぼし給ひ海なでしも
あまりこらし給なの給ふとこ
のころとも見ならずもちうう
つゝまらんひかりのくもなし
おりもありぬめのかくやのゆうう

○雪ゆうしうし　細　ものゝあはれ深とよん
給ふ時のゝ也

○いとゞあはれ　或抄　その時の堂上の歴と見ひ
いて給也

○ゆめとても　細　ゆめとるとしの人のあはれ
いつくハ君をゝもハるゝ　河　曹司也　しもハ
しゝ也　細　此しもの字をあらて可見
盃　房へ帰る人の此雪いとゝとさて給て世
三宮より帰給時のゝとあはれ出也

もすぐ雪ふるとても又ハいつるゝん
世ふるとおぼしゆゝしけるゝ頃
ゆゝしもさびしゆゝしけるゝ
いとゞもつゝふるゝ
いつをとまるゝ
のゝちすゝ
きもいつゝ

○うさ世ハ寄　源氏也　細　ものさハ
とゝとそんとゝ
河拾遺　うさ世ハゆさうゝ
心乃外ゝとゝ

○ひとりね　一方本　源氏の羽也　世秋　源氏の心

我さへうちとけてハ　盃さへ人くとの懸懸

○うゝ　河　中品の義也　桐壺巻よりの
細　なとさうくしくなるさま

○袖のぬれ〳〵　河　後拾遺　のとり川心のうちよりあふるるをハなその袖のぬれ〳〵

○世よつとそハ　細　源氏の羽

○人よりとよ　世秋　少年より物なれたる

○佛なるこのとき　河　拙
細　無常とさとるなんあると

なのうへ　源氏のうへ　なのうへ　源氏の心

うくいかばかりかなしかりけんと思ひやるべし
うちもさびしうつる雲の海かと
くてもいとうくやりひとり
つゝりけるをとるかくもかく
づしひろかとうちかづけ
ものとうちとけてハ　なのうへ
いとかなげさうじんてのこゝろ
いとかしこうづさかとなさて
うへのびやうふうにもてなして
ゆかしかるべきおもかけにて
しくおもうんとふかくかなづ

○袖のぬれ〳〵　河　後拾遺　のとり川心のうちよりあふるるをハなその袖のぬれ〳〵

○世よつとそハ　細　源氏の羽

○人よりとよ　世秋　少年より物なれたる

○佛なるこのとき　河　拙
細　無常とさとるなんあると

とうちとけてうきをまして　なのうへ
こゝろきあつかるまでおくれは海
人をてまつる人のうちつさ
世をかりひさしかこの世ふつ
ハかりはかなくてさしかまくる
ものうきなかにはかなくて
みなりもとふうちかなき
ものもうかくてそこそ
世のうかくうきをまてまつ
なのうへのとをとてうきなかの
うるはしくれとをとをとうれ
よりはかなくいとのゆ

○いみじきことのとぢめ　或抄　かなしきことのかぎり紫上の事也

○心のきは　巴抄　うき心の際也

○ほだしなく　細　さはりなく也

○今ハとて　或抄　遁世し給ハん時の事也

○心みだれ　或抄　心みだれんとなり　發心者の心よハからんとなり

ちかきすゑにいみじきことの
とぢめを見つるにすくせのほど
もみづからのこゝろのきはも残り
なく見はてゝこゝろやすきに
いまなんつゆのほだしなくなりにたるを
これかれかくて有し
よりけにめならす人々の今はとて
ゆきわかれんほどこそいまひと
きはのこゝろみだれぬべけれいと
はかなしかしわろかりける心の
ほどかなとて御めおしのごひかくし
給ふにまぎれずやがてこぼるゝ

○さてうち捨られ　孟　源へうちすてられん女房達の事也

○しめやかなる折　巴抄　明方の名香とまでや　おもしろく不断といへるなるべし

○かのおしなべてには　巴抄　紫上の御かたの人〱（となり）　或抄　一説　源氏の御てうもおぼえめでたき人〱也

○中将君とて　花　中将君をハ二条の上此きこゆる女おさなかりし時よりそだてゝ給へるを六条院忍びて召つかはしけるを中将君古へよりはゞかりて院のめしをもまいりちかくさぶらはじと二条上うせ給ひてのち

御なみだを見たてまつる人々まして
せきとめんかたなしさてうち捨
られたてまつりなんがうれはしさ
をおの〱うちいでまほしけれど
さもえきこえずむせかへりてやみ
ぬかくてなげきあかし給へるあけ
ぼのながめくらし給へる夕ぐれなど
のしめやかなるをり〱はかのおしな
べてにはおぼしたらざりし人々を
まへちかくてかやうの御物語など
し給ふ中将の君とてさぶらふは
まだちいさくより見給ひなれし

此人とうたてもあるまじきなりと

○ろのうまは 或按 多ひうちるまれなり

○人うたる也按 紫上中將と別而なりんよ

なりめうたる

○うるひれよ 河 文選曰 馬鬣鼠松青蘿 河委

花 河海之事多ひろれ侍れとも〳〵〳〵詮要と

取て尸侍し文選之馬鬣鼠松とくさてうるひ松

とよんはり馬鬣鼠馬のしてくさのてくさとと

もとるつさいろはとと云也其つくる生しろ松とう

るひれといふてくさ〳〵增の松とるさ人の形見と云

をいとあびつて人ひすぎる

やうもんいとうしてこと

よりてうもはすぎりろ

をうこと也てはいのうこと

わるぶ人うこふらうこと也

ようこんしぶ鬣うしはと

鬣ものふかつをてのはうこの

すぎをうぶかれとぶしをう

こんぶをうこふどもやと

こてうるのまつふぶうこる

をうひうぶふうこうはら

らぶしうこりとうこんのは

ろりて〳〵中將君と紫上のうたてろ心也心を

うたちるとと也 そく古人のはをひよりて

しうとといふ

○うとさ人よはさうる花 外人不見と應笑 白氏文集 上陽人

○人よひうこん 細人よ物面るさいれとうさのうと

○かをうこん 盃ものうをやうようこれんと

○うこうるーさ 河 頑

○ろいかりて 細 世ろの用意也

さうこんはうこはうすよりまうろ

もとうまきみ所うこうこうろ

こうこうるのうるはまうはまと

どをうんしはとはきくは

人ものうんかどうりはうこく

うひしうるうこうはきうんを

月ろよがきうこうんあるを毎

うこうるーさのうこうまうるこく

すをの世ものうこうやまうん

ほのろをうこうてまうしうれ

てうるんうこうものうこうりうし

いうこうんもはうこうれど

○月よみハ　孟　月見ることこそとハかくろうのあかれハ
夕霧すこし見よといへて紺吾しめく

○うき心ぞり　細　愁傷少人心も平生皆すてるとなき
巴梜　俄に道世あるハ本性すひすと人いはんと
所用捨也

○みくしま　或梜　花散里明石上すとやうへし

うちとふかまどろみてとゆきとなくさ
よるうちもあらしさえの
めかろハこよなくきこえはまさり
てことなくしらば世ハ大将の
君ハなどふかくにもすずそてやが
対面しゆるひありくらしてかへり
しめつゝやかなへのかひてらき
こゝろひとつにひとのこゝろめく
こえたし給へどふかしゆひあさき
世をもえすしさやみおもはするさ
ぐるまいまもふもらかのうき
あさつゆかそれハとへひとせさぐぐさ

○すゞこの御かど　河　とえんみかれる若ハすゑいへ葉の名や
としまするこの事しかと哉

○きさいの宮ハ　細　明石中宮也

○三宮とそ　細　白兵部御宮也

○母のゆいごん　細　院上の遺言との事

すざくの御かどもつまされハいと
よろづふくていづこともおぼつ
かなさゆゑそのみかどにあ
こやかうちよまつ世給てかの
こめかぞさるべきこともかくさ
めされおりまさ世給ひけるて
のけ給ひしみゑてこの御ゆ人
の御様とりも給てかくてかり
さ給ひつぎぬてあかれとも宮は
御位二月かわれバまことの御心
のきりめるうもまでことも、
おほやけより度々とまうり。

○かの御かたみの　河　六帖かたみとそ思ふにひらけわかるか
さくへのかたみハかたきえし花かと
花　聲華　朗詠下
○うへてみし哥　源氏也　河　ちらぬまハ見ひとも来よ
梅花ありときえて春なきまれて　梅かえまさの
にほひそてかともいまさ雪ハ梅の
弄　二条院也此巻より六条院なるへしといふ　私云
御法の時花の宴ハ二条院也今ハ六条院此六
条院の梅をも三宮の形見と可心得さるなれハこそ
細　此哥よりまてハ二条院にての事也春ふ
か成ゆくより六条のうへかれる也
○めて給ふかたにハ　或抄　春の庭を賞翫したまふてハ
なし　紫上の形見とおもひて見給ふハ何事もやるせなき
かなしみ給ふなる也
○鳥の音も　河　山鳥の声もきこえぬ奥山の
なれし心を人ハ云なん

かの御かたみの紅梅にうくひすの
はなやかになきいでたれはたち
出て御らんず
　うへてみし花のあるしもなき
やどにしらずかほにてきゐる
うぐひすとうそぶきありかせ
給ふ春ふかくなりゆくまゝに
御まへのありさまいにしへに
かはらぬをめで給ふかたには
あらねどしづ心なく何ごと
につけてもむねいたうおぼ
さるゝこの世のほかのやうに鳥の音

○何事につけて　或抄　さる人の心かくるへし
○八重さくら　河　朱桜　樺桜　樺桜　後見る春の
みなき八重かさねこそさくらもとまて花かくる桜か
○そのおそくとき　細　おそくとくさくを見わきて植給ふ事を
いふ也
○若宮まろか　細　此語にて二条院と見る説有
されと此六条院の花とおもふへきなりと又六条

もきこえざらん山のすまほし
うのみいとゞおぼしなりまさる
山ぶきなどの心ちよげにさき
みだれたるもうちつけに露けく
のみ見なされ給ふほかの花
はひとへちりてやへさく花桜
さかり過てかばざくらはひらけ
藤はおくれていろづきなどこそは
すめるをそのおそくときはなの
こゝろをよくわきていろ〳〵をつくし
うへおき給ひしかば時を
わすれずにほひみちたるにわかみや

院二条院の分別なく〜その時幼稚の心なりしかども

○本のかたちは帳と花　唐穆宗女宮中花開以重二項帳裳裾欄檻置惜花御史学士号曰拾香　今案三宮のおとりかたちは心とせハ唐穆宗惜花御史とをもとしたるもなりハ神もしらるる人の智恵とりハかたちとも也

○なりハ〜ふりの或抄伊氏引　河大なるなりハ〜ふりのたちもなる春さく花とりてまつりて

○さてはなん　世抄伊氏の引三宮に対し也

○今とは〜ふめ　花　ことひ今ハ今ハ〜ふりとと世とをしさをハ対面ハ有ものと三宮より給也

○世の時〜　弄　世上の時〜やうなる之伊氏の歌

○ものく〜〜　河　注　日本紀　禍　三宮の行也

○ふるのかたと　弄　三宮の伊氏ふれ神と引ものくるる也又云宮の我れ神なりや

○例のいろあひ　弄　除服の人也

或抄　心さ〜ほさハ一周忌ものも除服せとと

ぎさてこいろまとりいでてくちぐさまのめぐりよてとそてくるびとをあがめどいはもえつさきどこうとい

えそうとてくのかたなびとうつくしうもかたまれかたなびの神りあそんくるいでかくさはがりかたうるどばみぐらをそどめそびちんもりかたくさきを流きそんものうすは

やいのらとふのいろまぐ

うぐいすもかくも対面いとんわぐうとそとのうまぐさかたまばいとあ〜しまがりてくのかたひとをまぐくうのかたとそうわかうて御その神をりまきぐうかぐて

まぎうすおうすのまぐうんなとそうとそおりんのあとともんなとそうとすの用ともんなとそうとすぐあかたなおどもうれかたこのいろくもんもわ〜例のいろわひうもあやかどとか

○ろろくの直衣も　河　或人云妻服ハ一期の中ニ一度着之ニ六条院葬上の時已着服の義ハ何重可被着哉
案之着服の浅深ハ志の厚薄ニよりて人しれず略河委
花　紫上ハ八月ニよりて病ム伊氏の君本妻の服と更
ニ着しかく三ヶ月ニ成ル明ル年ハ春ハ
もろとびとの直衣ときかるハ餘長ニ成ル
ようて世の常のさくらいろなれしかやとハきかれて平
絹と着ル事也昔式部重明親王ハ延喜の御為
ニ喪ニ成ル一春の服とのゝ給ても三年ハ同ハ
私の衣裳ニ綾羅美色と着すと食器も朱漆と用
ル給ふ彼の記ニ見ゆ　私の志ハ法の外ハ也

○今ハ世ハ弄　伊氏也　細　紫上の心ニ成て木草
ともに人ハ成ル事と我身の世とのれなハ成ル事
てんといふ

○の道宮の弄　二条院ニ成ル事ハ二条院
ニ成ル六条院ニ成ル事ハ六条
院ハ渡給ふ事ハ可心得ハ山吹ハ成ル六条
院の南ハ紫上方ニ成ル

○ろるとのゝ君　孟　董也

やふかわるどあづるのいるを
しもいろいろのひるれどこと
ろかやつてひんをまれり
木丁屏風なるべし
ぬるのかどもいとはるれふ
てろぐどこびくあること
ゆるげよまやるれば
今ハてわるやそんるさ
んのろいろぬるまれるね
ゆるのどうふうしはがこと
いてつるぐかれがべんのこめの
ゆるこまるこうるよるるる
んるいどうきてゆるるて

○花ハ　河　古今　年ゆれハうるひハ物ハひわ〳〵ハ
あること花とゝ見れハ物ハひもる
或抄　河海ハ花とハ見れハ近代の説花惜也
白宮と董と花と論ハ成ル事ハ

○人やハ　細　廿三宮也

○るるハうり　或抄　以下伊氏の心也　又物語地也

○あるこ人ハ成ル　細　淡心也　巴抄　さり可清
孟　女の心ハ成ル事ハ成ル伊氏の心也
花ハ法華ニ成ル此行ハ

のるるどことるるとあるどハ
ゆるこれるるるるるるるる
ゆるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるる

○あかの花乃 細 花と佛の供養にわかせ玉え
盃佛に六時花とて其時の花をも奉也
○春に心よせたりし人 細 紫上也
或抄 源氏の詞也
○そのまへの花 六条院の東対紫上のを
給し系也
○あるまさり 也抄 上らうあかりをえ

あかときにおしうおぼさる、
わかのたなのかざりくしてかり
うくひすとばかりふところよせ
うりしくふかくて花のいろまさ
まづくめとるんなさるると佛の
御うぶりかそてとさろべかめれ
このほそくさいのまへのぶざさ
これかをとまふかへとろ花はまへ
なれかまのまなさとさがともに求
よろかきんをそそぎりしまるる花
まやわかんでありふかとてし
こころにしてなむろうき物なかん

○うへくなき 河 えてみてのちも宿の桜
花色くらうて昔かわれ 古今 色もかも昔
のこさに包へともうへきん人のうきをそひしき
○谷には春も 河 古今 ひかりなき谷には春もよそ
なれはさきてとくちる物をひもなし
花 廿三宮八卑下ありての給へとも物かくのまき
をさまさ詞也と院八思給ひてこともわれ心ろとも
とおかさろくよつきて故紫上八よろつにつけ桜
しもかりしすと思給へり
○そのこと乃 細 これにつきても紫上の事と思ひ
出給也一説こてそなよすみと思ひしまれあり
ありしと 和泉式部 今ではよるのゆると思ひ
出てなとかはりのうきねらもすくいつも心と同
ていてやいかり 或抄 紫上に世さきすまりあかせあ
てなとろてねしませんと思ふへもいかりもちと

ありきろがるしくありさなるろ
ところてきそりわまてげによ
みをもあひかきにあるこて
あかさよろつきとのほかふ、
れいへは谷には春もよと何
ごころもすききて給ふと、
るすしとこてあれくらもと
あがさろてはれてかなのま
のさそでもわかんりしこそは、
などかかくてもやまれず、
いはかりし給ひのはかな
まめとにでふにしなやみそてと、

○うとくしう 或抄 堂上の表のそ路すハうと
流くわりしと

○このえ路き 孟 堂上の詞きとおれもよきす
そうりせ也 或抄 哥ききの心も有と

○さすらう 或抄 明石上の躰也

おぼしいづる事はまづかの御あり
りのゆかしくおぼつかなくおぼゆ。
まかひおもりしころぞ御
めそなしよのえめとおいづぞ
らきさあみなまどのかきき乃
わりさいふとこおれおあうも
いとうしなきのかまきとく
おうわしちやざるればやその
なの御りこよいうりりての
うきうものざき路りよぶな
えるきさおりおれば御おかれる
まどかうまもえひとてなまて

○又うう多まハ 弄 堂上のよを是路明石まも
又まきり路しと

○こるきそハ 或抄 廿三宮のこハやく立路て
明石上のうハのとやうまおくしまきと

○人と哀と 花 もよりハ院の明石上よくう路
まず也

をそつまそてかうとも人のかまさ
里たまてしがなとなまつまそてハ。
みづからおもわくでらてゆか
しともをそおかし路りしと。
おぼしらくべらてみもおりお
まこひうかきめとまれば。
いかてあくきもさこてろ
ざいとらくぐろしすき
そかのやうふもりしおぼり
みじ路へをあくれところ
とげんハいてころべきこと。
いうつきおりひえそすべく

○君のいろは花ちるさとの浦へころびし時を云
河君ハとそつ心をこふもとゝすきつゐまいく
ゐるとおもへく

○いのちをも　細　若かりし時ハ命ハかろく思ふ也

○あらまほしさ知て　万水　ハ子孫のちれぬまを思ふ

○今まそなる　万水　ハ出家延引を思ふ也

いのちをうるまも。この世にまちこう
とまりてさことかくにこゝろづ
ひをせしよ。おなじくこの世ふつを
て。君のいろづゝふらつきめでり
しかうひかりし。ご法のがお
よとひめもし小倉をもと
づらおもへく此世の中すまさよ
らのさんまでよるさりつみまで
うらんゆりひるりしもすりの
世ふ今ハよりのかりちよきも
まてもおもしきがゆれ
うらづらのて今まてるて

○ひかるきみの　弄　源氏の心ざし上れるをのぞまれ
とさいらひすを申也

○おもしろき　盃　光より明石上の心也

○大かたの人めよりハ　細　明石上の返答也

○おもはさん　弄　世上の人の事

○あさくち　盃　浅くおもはぬと道心ハよろしからぬと云

さらがごゝろのわづらひのしるさ
こゝろしさてひかるきみのおすさ
よふこひのあるぞ。ど。おもしろき海
のこゝろふかくしてふとびかし
うらみまでおほよその人めよりハ何
がりかしをさるきんぐにころの
内のかぎしとおもつまでゆら
るかしまていかそうハうころ
やとくもおもひそんさゆる
あさらてはくるてかく
きさりもしさかくもち
出てなくなるとなく候う

○うつゝ河 銑 遅鈍心也
○浮世に住なからそさせ 花 始終道心さめとして世中を住なる心也住果ぬによりひて又なくし世に住果る心もあるへし是ハ世の外に住果る心也
○いにしへの 花 是へにとられてゐるはきのあまりに道世するとあるハ必来とをらぬ物也うつさやうなれともよく心閑にをひめくして道心おこるとハ其まことろゝさ也花山法皇弘徽殿女御為光女によきれさせ給て俄に位をすり花山にて出世なりともに後にハうつさせ給ふよりて花やるもまよふかなまひもありし也道心ハおこりやとてさめやをこりのあるへし 細 遍照なとの類ハまれなるき
○おかしのとめ 細 思唯あるへきなき
○うつゝまよくへき 弄 明石中宮腹の宮九位よもつきぬへきなり

とおもひし川にてあつきを知るに
なみやなみにたゞよふてさせ
なくさつゝりなみくしみもとも
なみてしいはまへのあとにも
をしのなみにつきてもこゝろに
おもへるも世にふりしつゝみつゝ
ありて世をいとふつゝみそよふる
とゝまりしなるをいのちあさてこく
これもとをおもしのあとわせ
なくこゝやそらみてもみなと
かひきなみひきとふうつゝ
なかくなるみのゝ雨にあかちまり

○さまそひ 花 是ハ源氏の浮舟也 孟 ゐるうしてあるハ道心おこるとわかし浅く思ひしてくるはハ卅分よそであるハ切よしんと云心也 細 わかさ 事也云々
○こゝさいの月や 花 薄雲女院の御事也
○心あるハと 河 ゐくさの野へ花さるし心あるハ今 弁ハうりハまえるかよさきを
○されハ大かたの 細 ひとまちゝて侍る

なき世なんまてはこゝれなく
なみんなこゝろやとくも嬉
くもゆくかれあかいくとふ
ひてやすくろくさいとあやを
しま雨でおりひのとらんころ
つきこれおきまよとりのへ
されるとのなくむしもね
とあなへとあそくつ物なふ
津におきさいのらぬのふまを
なりしまんちあのいふを
こそもまのふかるわあかでを
あはこしかれはあわさの世に

○たゝかひまて 巴抄 かきくもりてたゝかひはさま かくひろも衰へたるねまきたること

○年へぬる人は 花 業上の心也

○うき世中の 細 いまの世の中をいふ

つゐてゆくりしけれとさ世を おさなくよりみなそてまうくし こそさひしきのなしきも人 うりてよおほしいかならず うりつくろさふかも細の わたれはたぬきせとかゝ んよそれてとろおさめん ろふかく出てくさもしぐ ろ世中のなかさめとかわる すおさなきかどりゆつりて しわき御まかりゆ心世あり あの世よりうきそてらまて はかなき

○ひろきおもひ 巴抄 こゝろさしふかくおもひわするゝ いふ心也 或抄 年のゆくゑをおそるゝ也

○うてをあし 細 こゝろをさしはさむこと

○せきは 細 せきの字影略してみるへし源氏も いふ心也

○さてこそ 或抄 さありてこそ

ものゝふもうつせみのからにかはしきのかみてこゝろみんずて ものあはれもゆくゑなきとも おもしきすぢもひろきおもひ めでたきうくれかたのあさ うきずらなきみるさらるゝ 霜のみなまでむかし海のほとり ぐるしよりてもわしつゝき 露おもひかりしぐれのなを 世もおもわれはおりへしげれ んよもわやしくもかよはかの とおぼしたるさてもみすきの

○つゝて　泉　幻と　明石上のうへ　文まうす也

○すくなき哥　河　なきも　なし　我をこよなく　思
きれ　春　久　うゝ　うゝ　もす也　くのとこよなく
巻　よのなう　是ハ　庶　ら　せて　ろ
花　源氏の　明石　れ　へ　とり　源　哥　也　雁　とう　の
せる　羽　とう　わ　へ
○人　の　れ　わ　り　ゐ　ハ　花　へ　明　石　の　れ　へ　人　な　く　ま　う
源　て　夜　中　へ　我　出　方　へ　り　源　り　ま　也　出　氣　色　と
ハ　源　よ　心　へ　り　へ　さ　我　ゐ　の　恨　ハ　つ　さ　ま　う　て　れ　為
よ　渡　と　る　し　ゆ　る　う　し　也

○うゝ　の　し　哥　明石上　也　細　源氏　と　雁　と　ゆ　し　う
也　源氏　の　今　ハ　花　へ　と　め　て　源　ハ　さ　う　へ　我　ゐ　も　同　也

ゆをとうのよ　雲井　めう　元
しのの　おう　へ　め　い　へ　う　う　ゆ
う　う　て　源　へ　て　と　て　源　う　な
源　ゆ　な

かくもうのうのうゐ　ゆ
いでもつののさよゐ　ゐ　ね　よ
明上の心
へ　の　の　ゐ　う　さ　海　い　う　う　ぎ　ゐ　う
し　ど　い　と　ゐ　ゐ　ね　さ　海　よ　ぎ　び
ゐ　と　う　ゆ　う　ま　み　の　と　う
ど　し　さ　よ　ゐ　の　う　へ　ま　と　れ
て　海　ど　ま　と　れ
う　ど　ゐ　ま　う　う　ゆ　ま　し　海　し

心　て　花　ハ　ん　と　ゐ　ま　て　さ　う　へ　ま　の　ま　ぎ　上　の　後　ハ
源　氏　ハ　れ　を　と　も　ハ　る　る　ゐ　の　る　さ　へ　へ
ゐ　り　へ　へ　花　明石上　と　か　り　へ　へ
○う　ま　め　さ　ま　し　き　細　へ　め　ハ　ぎ　上　の　明　石　上　と　り
ま　し　き　物　う　源　ひ　し　へ　へ

○又　さ　う　て　巳　妻　明石上　と　ぎ　上　へ　の　中　自　他　ぬ　う
う　し　へ　へ

○人　ハ　さ　し　も　細　人　ハ　ま　う　へ　し　源　氏　ハ　う　へ　ん
ち　へ　う　へ　へ　花　鳥　の　説　い　へ

う　う　う　し　花　の　び　と　ま　に
ま　ま　う　う　う　う　う　う　ま　ま　海
も　る　海　ま　ま　ま　ま　ま　ま　よ
ま　ま　う　し　と　ま　の　ま　て　ふ
う　へ　へ　ま　と　へ　ま　ま　ま　ま　ま
て　へ　う　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
う　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
け　ど　ま　ま　て　ま　て　ま　ま　ま　ま
ま　う　ま　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
も　ん　う　ま　う　ま　ま　ま　ま　ま　ま
し　い　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

○夏のはつる　孟　是より四月のる也花ちるさ
より更衣のはつる　衣を調進也

○夏衣哥　花散里也　細　今月八月と八今月と
云心也古きもひもをとゝ行へしとゝ堂上々々の
衣裳をも調ーはつる時節つきをもひ出ー
はゝさゝゝをゝやハせるとハ増進をゝ

○羽衣乃哥　源氏也　花ちるせゝの世ハひるすゝ世
をゝ衣のうをゝさハ蟬の羽衣也夏のひゝ衣をいゝ
也扨　贈答ハさはゝとうわゝをもてうゝ蛭の世のむ
るさゝゝ羽衣ハ蛭のをゝ也畢竟空とゝ源氏
○きゝハ物乃哥　或扨　源氏の心也

○世房るを　孟　源氏の自也
○里より来ひて　細　源氏の仁恕ある也

○扨くゝをゝろ　巴扨　をゝの又ゝあるゝ也
○紅のさゝゝゝ花　紅の袴ハ黄をゝひゝる
萱草色ハ服者の用色也中將君の主君ハ服を

やうよりでゆるゝよりかの
めゝゝ自ゝ入ゝりくもゝゝ
のゆをゝ自をはるゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ

きくの也主君の服とハ一春のろうさう故也
細　紅の黄くゝろハ桃子色也

○いろよろゝや　或抄　浮氏の汐也
○此名ゝて　細　逢といふ心也

○さしてハ哥　中将君也　河海盤多也花鳥事少
たゝてたゝも理分明也仍而花鳥説とのとゝ
花　清輔説ゝ人の水ハ社頭ゝ神水とて瓶ゝ入ゝ
水とゝ定家卿説ハゝ人の水ハ縁也さゝゝの
水社頭ゝ入ゝ人ゝと古今哥ゝ多とゝ
ゝ人同しさゝ　俳案抄

のさゝとゝけそひたゝ
ゝんぎゝいゝのひゝへいとゝ
びいゝよゝゝゝふゝゝゝ
ゝぎゝゝあゝてゝゝゝゝゝ
ゝさすゝゝゝけゝとゝ
引けゝゝすゝゝゝひとゝ
ゝよをゝゝけゝとゝ
てゝゝゝゝゝこのゝゝれゝ
ゝをしとのゝてゝ
ゝもゝいゝゝのゝよゝゝ
ゝめゝゝのゝゝよゝゝ
ゝゝゝしゝて

の名ハ伊氏の哥ハ賀茂祭の日ハ神社
のゝゝもゝゝゝゝ紫式ア心いゝゝ
ゝ中将君の哥ハ心ハゝ人の水ハ二条上ゝゝ
水草のゝゝを絶ゝ心也さゝもゝのゝ
ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ哥　浮氏也　花ゝ
中将君ハゝ人ゝ草の名とゝゝゝ
細　罪と摘ゝゝ
○さゝゝれハ　細　時節とゝゝ

○十月ゝゝの　年　十四五日のとゝ
○大将の君　孟　夕霧也浮氏のゝゝ人也

ゝゝて
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちりとるゝせゝ河色々の花摘る時鳥ちよを
なるゝせゝあるさこゝ也
花子規のなくゝ為と待心也毒とゝゝせゝい
ちひゝゝ

まゝとうゝゝ河 耿々残燈宵壁歇蕭々暗
雨打窓聲 白氏文集

ゝゝ也 河 ひとりゝてさきゝゝゝゝゝゝ子規いも
うゝゝゝゝゝゝ

○きのふきくと　細　八月の周忌も近てうも
或撰　夕霧の羽

○ちりはうり　細　源氏の羽

○こくらくのちんてう　河海　當摩寺の縁記白氏文集ホ
と引て云極樂易奈羅　サンの号なり故に和漢
先蹤有り仍紫上も心さしとゝれもろこ　河春

○ちりうり　俊都　弄　誰ゝとゝ
孟　紫上の僧都よりとゝれしゝや

尺　沙門新ぐ法をれぐて
まてとゝうぐとゝ
まのうをとゝのおうかぐ
よゆとてもやすくちうり
仏よりいやふりをきて
ぐのとんとゝおぐら海
世のてゝうをとゝあをん
くのゝうぐをとてうぐく
の男陪ぐこあゝびうん
ゝやどぐさ海ぐもあをこ
ゝうとゝるあゝちうぐふ
そのんくりうきてをさゝるれば

○ゝうのゝ　細　夕霧の羽　易陪羅經ゝのゝ
と紫上ハゝくゝをゝさ海ハ心やとゝとゝうしろ
やとゝさゝるれとゝうゝきて世ゝハとゝみ
ゝり限とゝゝ　ゝうくゝ

○世ゝハゝうゝあ　巴撰　紫上の短冊とゝうゝ

○ゝれハゝうゝあ　細　源氏の羽　紫上ゝうゝきてとゝう
ゝうゝをゝゝハとゝゝゝ源氏のゝれゝうゝ武宿世
ゝりゝさゝ
○いのちゝりゝさゝ　或撰　花散里ゝのゝりゝ

まゝうゝくゝすぐゝさゝゝゝ
海海のゝんよゝゝぐのゝうんゝ
ぐゝさゝぐのゝおゝやゝめゝぐゝも
ゝうゝうゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐゝゝゝうゝやゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの世ゝゝゝうゝゝゝの海ゝゝゝ
ゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐゝうゝゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○なこそとてハ河　干公高門のタヘタ夕霧天臣
子息多きハ也

○いとゝものあひ　也秋言語を絶しる時分
とかゝきまのうてとく

○いとゝ多そう河いとゝ人のタヘとゝ八子親いとゝ
ちうとう古とゝまゝ
○きゝ人　或秋此子親ときゝ人也さてあてゝいと
タ霧也
○ときさ人と哥　源氏也　或秋　此村雨八波のこゝろ
あゝ人さと哥の心八朋也

○時鳥哥　夕霧也　細　君と八紫上とゝ
弁ときさ人のやとゝとゝとゝ子親ときてわとゝ

ゝ多ゝとつきゝるん　此哥可然平
○女房ゝとゝ　細　草子地也

○ゝゝゝゝ　細　紫上の在世とゝ

○いとゝゝゝゝ　細　六月也
○此の道ゝ河　時移事去樂盡悲來安至春之
日冬之夜池蓮衰爾宮槐秋落長恨哥傳
尋河海時移事去の語とひきゝ是八蓮のゝゝ八少
ゝれとゝ惣の心とゝゝゝゝとて引と

ゝゝゝゝ

○いと多く河　文字さそまたりよもさらく人の方
よいよりぐろうさそうん
花　河海引哥　こそハ不相應哥　拾遺　思禅五會讃
云一こ池中花盡滿花こ惣是往生人　悲さう
るひろ哥わくさう

○ふそこ　この河　我の名衰こそうこうさうくと鳴
夕くれのやまくこそすてーこ
細　ふりのこ乃ふるとくもう　我のこや衰こ切
うんの心ありう

○ほきくと哥　源氏也　河　晩とて虫のこそ
いつ後撰よ蟬を蛍虫もうあう
細　月ろしを虫といつ切りろ一心ハ我至極へき
ろしあろひろしさうくるさてもうくくと
ろうきとハ月ろくるて云心也
弄　そこるうーさハこそハ我ろくよ又とこそ人
てるくとうあう
○夕てんよ　河　夕殿螢飛思悄然秋灯挑盡未能
眠長恨哥　孟　玄宗の心と引てうくも也

○ろうくとふ哥　源氏也　花　蕭蕭水暗蛍知
夜朗詠　弄　衰ろこ乃さかよりの蛍ハ聲
ふそろへくいろ人此よよ此哥可然平かろハとる
ひうとしろ我ハいろひよ無分別心ろや
○七月七日　弄　ねつさるろう

○りあひろ人を　河海金谷園記とひう

○ふいこ当く　河　とく彦とろわ君と乃
うよあるくそこひうう

○七夕の哥　源氏也　細　七夕のわつせハ雲外ろ
うそ紫上よ別ー時の心ハてさうく

ありうるどまつ紫ー出ろく
よりまぐくしててどとおハ
まろかどよ目もてれまろ日ぐて
しのこふこるやうろふ出雲の
ぞーこのうだくをひうりれを
尺あつこまそうぐひおうり
ろう

つまぐこうどあさこうすえ
の目をうどぐ海さむしよよ
ろかろのいこ出ろうびぐふ
もゆ殿よ音光てとまハ乃
ふうこもうろすぐふのぐら

七月
うをしろ音をこもろ
きハけぐうあさおりひろう。
七月七日も例ようろうこ出
く出ろうびぐもしおらで。
つまぐよあぐろうろて出合
うこうりふーまぐ乗こ一和
おにうひてつまこ七出
ろうよお載の車のいこ三まぐ
どおこうりこうてこ尺ここ
うれハいぐろひて
七夕のわつせハ色紙ろ

○凡の考え　河　秋八月と名まれそとてすれ
共のうえ凡共のうえ

○つくもちろう　細　八月朔日比也

○今まて（はきろ　河　人の身もすうこうものと今
まてよりてもへめろ世よりそありきれ

○正月　細　惣而八正月と八四十九月といてう
よ八周忌といて

○いすのつて　河　齋　斎食也

○うのまんさう　或拠　紫上の心さうとろうまん
さうろう

○君こうろう哥　中将君也　河　拾遺　我身よ八人に
きるのつさせよ八さのふとそてとにんさうきう

○人こうろう哥　源氏也　哥心明也

○うろうさのひろう　弄　此故事可勘

○ろうろもう哥　源氏也　河　奥入めうまもきめう
菊の露そうのうれにおうるうさうく
後撰　ろうろもうさのう　秋の露八うろうん
りのしにひうをうや
盃　紫上と共よ菊よ綿とうをつうりのとう

うをびるのふのそてというんと
うさうをうるをうてんうのて
人うう親方も来ふのびて
ぬりかうるうぶかうろと
うさうんうもんぷ月よあてのの
うさおひうろうさうと所うん
じて

かうろもふをにおのうさうれ釣
あしひうう秋よかうう秋ふ所名
月を大うもの所毎ぐうかうん
いうぐうあおひてかうのえ
のうきあぐもえもいうん

○ゆしうゝ　河　後撰　神無月いつを時雨ハゆし
ゝく袖ひつるゆりハるゝさ

○うゝやまゝく　細　けゝをゝてゝさゝゝ也

○大空と哥　源氏也　河　まゝゝゝハ幻術のゝ
仍術者を幻と云也此哥の心ハ蜀の方士ゝ楊貴
妃よゝゝあひゝしる也方士ハ術士の惣名也
ゝのつゝゝもうゝやゝゝゝゝゝゝも彼方士ゝ
碧落をさゝゝて奔ゝ電のゝゝと心を
花　雁使を方士ゝ比ゝゝ也
○五せちゝゝ　或抄　霜月也
盃五節の日殿上ゝゝゝ也

○殿十て　細　童殿上也

○頭中將藏人少將　細　雲井雁の兄弟

○ゝゝ　河　後撰　神無月いつを時雨ハゆし
ゝく袖ひつるゆりハるゝさ

○うゝやまゝく　細　けゝをゝてゝさゝゝ也

○大空と哥　源氏也　河　まゝゝゝハ幻術のゝ
仍術者を幻と云也此哥の心ハ蜀の方士ゝ楊貴
妃よゝゝあひゝしる也方士ハ術士の惣名也
ゝのつゝゝもうゝやゝゝゝゝゝゝも彼方士ゝ
碧落をさゝゝて奔ゝ電のゝゝと心を
花　雁使を方士ゝ比ゝゝ也
○五せちゝゝ　或抄　霜月也
盃五節の日殿上ゝゝゝ也

○殿十て　細　童殿上也

○頭中將藏人少將　細　雲井雁の兄弟

○ゝゝ　河　小忌青摺　山藍摺也
花十一月中卯日新嘗會辰日豊明節會ハ
山藍ゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝを着ゝゝ之一代
一度の大嘗會ゝゝゝゝゝ

○いゝゝ　細　筑紫五節ゝ文やゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝ　弄　万ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○宮人ハ哥　源氏也　弄　日蔭のゝゝゝゝゝて日
月の光もゝゝゝゝゝゝ日蔭ハゝゝゝゝ似せて系
とひゝて付也
細　我身ハ月日のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○ゝゝゝゝゝゝゝゝて　盃　當年ハゝゝして明年世を
ゝゝゝゝゝ
○今ハゝ世をゝゝ　河　聖人避世事和漢之例
先蹤不可勝計　細　源氏俄院ゝ隱遁ゝゝゝゝ
ゝゝ宮治ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○年のくれゆくも　盃　くくの心也

○やまとハ都　河　後撰やまとハ物　やれハくるた
ゆくしるくくもるとくとまきわり
○まそてゆくのうて　也抄　まへ破殘　ふひ

てうさ世どやくくさるづく
てもゆくうちうちあぐ
しつまてさぶ面んぐかも
などくかつまてやのおひるど
やどろくさくい面るんぐさり
ちかしおらひどちくさぶ面
そぐくいおいどぐ面づさ
ちくさてんまるまふう
乃芸のもうづくうか
さくくりかしおらまり
くいちろづさんのはみども世
ぶるしとやびれうまやすう

○うの流手　細　紙上の手跡也

○まそちとせの河　ひすとしひるまひて水さき
ののくくそ年ゆくんすう考
○天とうくくさ　或抄　道世ーてハくんもいめ
ものくくされハのうくくさてもうひすくくひ
すくくしひるまひるの哥ていうるくて

つのうおくるを面のはるで
よはんじはまてやせおひる
するよらのと面のうりひ面で
うりまりおひるもある中か
あはひのハくふゆひはる世
てで有もるづくくと紙
ちくくあどのくうなりふ
ちる世のくくあどみぐい面
のやうかるまづさあどぐに
ふくせのくくよくつりちる
を人どるりあづさくくあ世
じうひかてくうちるんぐ

○いとゝゝゝ　万水　是ハいとゝまるさまをうゝ人と為
まして源氏の出家ある人さきゝるれハ也
○ゐてゝ人の　弄　松草子ニ昔こひしき物ニ
盂　松草子むりこひしきものハ母くさ文

○水ゝさまるれ　河　洙与鞠俱悲且吟黄壌誰知
我白頭徒念君唯恃老年淚一灑故人文集

○とゝやと　万水　文とやなり行く

○たての山青　源氏也　花　跡ハ筆跡の事也
河　たての山なりとをたてゝゝうつゝさへうつ
ゝゝとて　たての山こゝてやさつゝ時鳥こひしき
人のゝゝうゝん　或説曰たての山ハ四天閻也ゝと

三三人だりおまへてやうゝと
ゐいとゝゝゝ

○仏名と　河　寶亀五年始之ゝ　見官東夷類
或天長七年十二月始有仏名或説承和五年十二月
十九日始之ゝ　貞観格云太政官府應行仏名懺
悔事
○ちやくちやうの河　仏名夜　初日　後夜に導師着礼
盤唱仏名畢錫杖又才三夜　錫杖後藏人受取内
侍取出綿被於御導師才子俊ホ
○いくまるさ　弄　仏名導師源氏のいのりとも
さゝ物て也

○さうさう　花　禁中仏名の才三夜ゝ柏梨の勸盃
と云ゝあり　昔左近中將和氣某以摂津国柏梨庄
寄左近府官人の酒料ゝあてゝ　是ゝよゝて仏名夜
左近府ゝて勸盃のゝあり
○ゝゝゝろゝゝと　花　延喜十九年仏名導師雲晴
律師賜に阿古ゝ　天暦四年仏名導師浄藏三礼

之間自簾中給に衣
○院ゝと　或抜　源氏也
○ゝゝはやゝゝ　弄　白頭夜礼仏名經　悉ゝ

○ゝゝあゝひゝと　細　周忌ゝとゝゝれハ也
河延喜十九年十二月十九日内の仏名に導師そ
雲晴法師ゝまゝて仏ゝゝゝの夜にあゝひゝ
ゝゝゝゝ出さゝて仏ゝゝと賀ゝてゝゝゝゝ
ゝゝつ弁てゝ奏ゝゝ　雲の中ゝ山のゝゝと
ゝゝてゝゝゝゝ花ハゝゝゝゝ　下略
○時ゝゝゝゝ　細　朗詠ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

○まことや　万水　例の式アリ筆法也

○春まての哥　源氏也　細　いろつくとハ澄ひくこ

○ふ世まてと哥　導師の哥　孟　源氏と祝〳〵

○人〳〵哥　孟　人〳〵の哥とハのそのと草子地也

○その日そ　弄　源氏内ゟ外様へ出給へ也内ゟ

のこゝろ

うちどゝめでいろうゞ世をまた

まことや導師のさうゞ

てよろこびあり

ままでの命もまてゞ

らいろづ物をくゝ

ゆへ

春のまうゞ

をまて日ゞ

うちゝんゞ

ゝゞ

ゝゞ

○年くれぬと孟　源氏の心ゝ哀ゝ

○ゝゝ　孟　河　爆竹　鬱鬼驅儺聚火兒東坡追儺儀禁中亥一刻左右近立陣昂用茅明門儺人小桑陰陽師貴条讀呪文畢方相先作儺声以文擊楯如此三反群臣相茅和呼追之　下略　朱花物語　人ゝハよゝ

○ゝの　源氏也　河　物ゝ　細　院の拜礼今年ハ

用意ゝ也

ゝゝ

ゝゝ

ゝゝ

ちりてこのうぐいすをゆめてきも
しるふかきこちたかきの陰のそて
地をうぐのうぐいすもかぐかあり
おがーまうけてとぐ